[氏　名]　加藤　寿

[出身都道府県]　埼玉県

[卒業期]　29 期（平成１７年度卒）

義務年限は医師キャリアの強みになるのか？

初めまして、埼玉県 29 期の加藤寿と申します。現在、医師 17 年目になりますが、義務年限を終えて数年経った状況での体験談となります。正直に申し上げて、私は地域医療を希望して自治医科大学に入学したわけではありません。元々はブラックジャックに憧れて、さらには卒業時には形成外科というとてもニッチな科に行きたいと希望していたため義務年限に関してマイナスのイメージを強く持っていました。しかし、以下のような経緯を経て、最終的には地域医療を実践する家庭医になることを決めました。今回は、1. 外科志望の私がなぜ地域医療へと方向転換したのか、2. 義務年限は医師のキャリアとしてどう考えれば良いのかをお話ししたいと思います。皆さんのキャリア形成に少しでもお役に立てれば幸いです。

・外科医から総合診療・家庭医医療への転身

私は、本当にたまたまなのですが、義務年限内の初期研修と後期研修以外の 7 年間、同じ病院で勤務しました。人口 12,000 人、当時から高齢化率 30%を超える、

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

いわゆる中山間地域の公立病院で、町の中で唯一の病院でした。当初、外科医として赴任したのですが、簡潔にいうと以下のような経験を経て、進路を変更することに決めました。

・外科医として地域の病院で勤務し始めて、緩和ケアの仕事が多くなった。

・当初は緩和ケアという領域に良いイメージを持っていなかったが、在宅看取りという経験を経て、医師が人が亡くなるという過程に関わることで、大きな感謝と満足感を得られるという実感が生まれた。

・異動の関係で、緩和ケアチームの運営を任されるようになり、多くの質向上に取り組んだ。

・在宅医療強化をした所、がん患者の自宅看取り率が 12%から 36%に上がり、在宅医療の奥深さにハマった。

・院長の退職で脱メタボの保健活動に携わるようになり、予防医療の奥深さにもハマった。

・上記のような活動から多職種で活動することが多くなり、組織を動かす奥深さにハマった。

こうして私は、いろいろな偶然が重なり予防医療、終末期医療という両極端な医療から地域医療の醍醐味を知り、そこから家庭医という選択肢が生まれました。小さ

い病院だったからこそ、色々と自由にできたという要因も大きいと思います。では、なぜ私が外科医ではなく、最終的に家庭医を選んだのか。 その求められる能力が非常に幅広く、発揮できる領域もとても幅広いからです。一つとして同じではない患者さん・ご家族の人生にどのように関われば良いのか。医学としての治療だけでは解決できない難題も多く、でも大変だからこそとてもやりがいがあります。また、病院に来る患者さんのみならず地域全体を見ていき、さまざまな人と協力しながら健康を守る。その大きな動力の一部になれる感覚は、大きな病院内では得られない充実感でした。そういった地域医療の醍醐味を知り、それを行える専門医は家庭医以外にないと感じました。また、「家庭医学」を学んでいくと、自らが実践していた診療や活動が間違っていないことを確信することができ、さらにそれをきちんとしたフレームワークでアウトプットすることができるようになり、これまで自己流で正しいのかどうか悶々と悩んでいた心の霧が晴れていくようでした。

皆さんの中には地域医療にあまり良いイメージを持っていない方もいると思います。私もまさにそうでした。しかし、実際に経験してみると、最先端の医療を実践することよりも、何気ない患者さんや家族の生活や想いを汲み取って、身近でありながら適切な医療を提供することが、医師としての大きな充実感につながることを実感し、形成外科医から家庭医へとある意味 180 度方向転換することにしました。人生は出会った人、経験したことで何が起こるかわかりません。是非、まずは目の前のことに精一杯取り組んで見てください。どんなところでどんなふうに働いていても、医師として働く中で必ずや刺激になるもの、学びになるものがあると思いま

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

す。それを大事にしながら活動していれば、必ずや医師としての成長につながります。

・義務年限は医師のキャリアにとってマイナスなのか？

私は学生の時に、県人会の先輩から「義務年限は我慢の時期。」と言われたことがあります。確かに、義務年限中は医師としての医学の知識と技術を積み上げるのが難しいことが多いと思います。しかし、実際に義務年限を終えてみると「自治医大の医師は本当に優秀だ」と聞くことが非常に多いですし、実際に卒業生に話を聞くと義務年限をマイナスに捉えている人の方が少ないことは、紛れもない事実です。私も、若い頃は、「仕方がないからそう言ってるだけではないか。実際に専門医を取るのは確実に遅れるし、足枷でしかない。」と思っていました。確かに自治医大卒では、外科医として手術の腕で日本の中でトップクラスに入ることは難しいかもしれません。それは事実だと思います。ただ、長い医師人生でどの専門領域に進むとしても、周りに恥ずかしくない診療能力を身につけることは全く問題ありません。要は、何を目指すかです。

今回、私が皆さんに一番伝えたいことは、「義務年限を足枷のマイナス期間と捉えず、人生のプラス期間にする努力をしてほしい」と言うことです。地域医療の現場で熱心に診療に取り組んでいれば、医療の本質である自らを省みる能力・本人のみならず家族を含めた家庭全体を診療する能力・フラットなチーム医療を形成する能

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

力・組織を動かす能力・地域全体の医療ケアを俯瞰する能力などが身につくはずです。これらの能力は、どの専門領域に進んでも役立つものですし、一人の社会人として活動していく上で最も重要なものといっても過言ではありません。この部分こそが、自治医大生は優秀だと言われる所以であると思います。今後、診断をはじめとする知識ベースの能力や場合によっては技術の一部は AI の発展で、医師の存在も脅かされる可能性があります。医師というものはこれまでは医療技術屋であるという側面が強く、とても狭い世界の中で生きているので、上記のような幅広い能力を持つ医師というのは、存外少ないのだとよく感じます。これから求められる人材は、人と人との関係性を構築し、全体像を把握しながら、組織として実現可能な範囲で最大限のアウトプットを実現できる人物像です。地域医療の現場では、若くしていろいろな責任ある立場につき重荷になることもあるかと思いますが、上記のような能力を伸ばすためには最適なフィールドだと思います。将来的に都市部に勤務しても、地域に勤務しても、人と人とを繋ぎながら、実際にあるリソースで最大限の価値を創造するという自治医大マインドは大きな強みとなって、皆さんに還元されることと思います。

最後に、スティーブ・ジョブズが 2005 年にスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチの一部を紹介します。

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp

「将来をあらかじめ見据えて、点と点を繋ぎ合わせることなどできません。できるのは後から繋ぎ合わせることだけです。だから、我々は今やっていることがいずれ人生のどこかでつながって身を結ぶだろうと信じるしかない。」

人生は、自分がどう捉えて、どう活かすかです。義務年限が将来的に皆さんのキャリアにプラスになることを祈っています。

☆医学部卒業生の相談窓口☆
自治医科大学 地域医療推進課
TEL0285-58-7055　E-mail:chisui@jichi.ac.jp